佛教復興と現代の日本

山口等澍

一

最近、諸家に依て佛教復興といふことが屢々唱へられてゐる。今年は時恰も大體に於て、佛誕二千五百年に當るのであるが、釋迦誕生以來のこの長年月の期間に於て、佛教は幾度かこの所謂佛教復興を繰り返して來たことは言ふ迄もなきことであり、それに依てのみ佛教は發展を遂げ、釋迦の成道せる眞理を今日の形態にまで存續せしものと考へられるのである。かの中興といひ、重興といふ言葉は、何れもその根本意義に於て復興のそれとたいした變りなきものである。復興といへば、古に復して興隆するの義で、即ち歴史的古典的精神の生けるものに身を以てぶつかりその本來の生ける精神を現代的に把握し、理解し、現實的に興隆することである。現實は常に動き、現在は絶えず流れてゐる。現代には現代の歴史的時間的特性があり、龍樹の時代または釋迦の時代には、亦夫々の歴史的時間的個性がある。たとへ、その内容となる本質的な根本精神には相違はないとするも、龍樹の時代と現代とは、その根本精神を生かす形態に相違がなければならぬ。否、相違が必然的に存せざるを得ないのである。それ故に佛教復興の仕事は、(一)歴史的古典的にその根本精神を如何に生けるものとして把握し得るかといふことと、(二)その生ける歴史的古典的なる精神を如何に現代的

に把握し表現し得るかといふこと、との二側面の合一されたるものとして考察されなければならぬ。眞に佛教を復興せしめんがためには、單に古に歸てその形態の中に生命を見出だすのみでは不完全である。古に生きたる精神を如何に今日の形態の中に生かして把握し得るかゞ更に最も重要のことである。これに依てのみ始めて佛教復興の事實は現代的に生けるものたり得るからである。佛教は法身常住を說く、然もまた佛教も畢竟するに人間的文化現象の一つであり、それは一個の生命を有するものである。この意味に於て佛教もまたそれ自身、生者必滅の理を有するものと考へられる。世を擧げて佛教に關係する者が墮落すれば、佛教もまた如何に永遠不滅にして天地を絕する底の大眞理を保有してゐやうとも、亡びて消え失せるのである。まことに吾々の日常的な實踐的體驗的な行持の現實的な繼續に依てのみ諸佛の道は通達し、それに依てのみ佛教の大道は現成せしめられるのである。そして、そこにこそやがて吾等が當來は佛祖たらんといふ祕義も存するのである。

二

さて佛教復興といふと、一般に西洋の文藝復興の Renaissance のことが聯想されるのであるが、これはまことに重要なる一つの考察である。佛教では常に十方世界佛土の中とか、十方三世一切佛とか、盡十方界眞實人體とか、淸淨法身毘盧舍那佛とか、千億化身釋迦牟尼佛とか、等々々、樣々に言ふが、何れもこれ世界の槪念を宗教的に包藏するものである。そしてローマ、ギリシヤ、ヨーロッパも、また世界內の存在である。人間の所產である。十方佛土の世界觀を說く佛教は當然これらのものも包藏しなければならぬことは言ふ迄もない。ルネツサンス精神の理解に依て、吾々は復興

の最も正當なる意義を把へることが出來る。ルネツサンスに於ては、歴史的古典の研究といふことが同時に今こゝに生ける個體的な擲ぐれば痛い人間の自己研究といふことであつた。而してこのことは、死學者ならざる生ける學者は常に通過し來れる點である。釋迦の研究は、それ故に、吾々の生ける人間的個體を以て、ハイデツカーの言葉でいへば人間的生存を以て、生ける釋迦の眞理を身を以て理解 Verstehen することでなければならぬ。釋迦が何故に世の無常を感じたか。何故に妻子を後にして城を脱出したか。四門出遊の意義は如何に理解されなければならぬか。彼は何故に山に入り、何故に山を出たか。彼は如何に當時の哲學を學び、如何に苦行し、如何にして苦行を捨てたか。肉體の意義を彼は如何に考へたか。彼は如何にして華嚴を說き、如何にして阿含を說き、如何にして般若を說き、法華涅槃を說いたのであるか。總べて斯くの如き諸問題が吾々の身を以て古典的に體驗され、理解されなければならぬ。そこに佛教復興の根本義が存する。

佛教は根本佛教として基礎的に確立され、小乘佛教として傳道され、更に大乘佛教にまで發展したと考へるのが、至當であると思はれるが、吾々が眞に佛教の復興を遂げんが爲には、西洋のルネツサンスがギリシヤの古典的原典に溯りしが如く、少くとも根本佛教の原典まで溯らなければ十分でない。その點、明治以後の日本佛教は、最澄、空海、法然、親鸞、道元、日蓮、等々以上に一歩出て彼等の體得せし眞理を生けるものとして把握し、吟味し、眞の佛教を根本的に理解せんことを企圖しなければならぬ。さうしてこそそこに特殊の歴史的意義が出てくる。言ふ迄もなく、印度の佛教は、支那に繼承發展せしめられ、それは更に日本に繼承發展せしめられたものと考へられるのであるから、從て、日

本の佛教は結局佛教を總べて生けるものとして保有してゐるとも考へられるのであるが、眞に現代に於て佛教復興の實を擧げんと欲するならば、吾々はサンスクリット及びパーリー語を讀破する原素をも持たなければならぬ。佛教を說く言葉がもつと解り易くならなければ駄目である。漢譯は或る專門學者に從へば、驚くべき正確を有してゐるとの事であるが、あの玄奘三藏などの不惜身命の人間わざならぬ行願の勢を見ては、まことにさもあらうと思はれる。然しながら漢文また漢文調子の文章は、現代の日本人には一般的でない。專門の學者には何でもなきことであり、却て煩瑣を省くことにもなるであらうが、今迄の佛教に關する文字は大體からいつて難し過ぎた。それが却つて經などを、のつぺらぼうに讀んで一般人から布施をもらふに都合がよい等のことに墮し、やがてはひどいのになると何を誦んでゐるか自分にも解り兼ねるやうになつては、蓋し釋迦の賊である。文章が一般化されてゐないと、やがてはその生命の本質までも畏縮し枯死する憂へがある。近來佛典の邦譯等屢々行はれることは、即ち根源としての人間一般の佛教理解に大に貢獻するものとして、更にその大成が期せられなくてはならぬ。佛教に關する文字が日本語にならなくてはならぬ。當然のことである。然も大正新修大藏經は完成し、もとより之れは劃期的な大事業であつて、佛教研究に莫大の便宜を與へたものと賞讃さるべきは言ふ迄もなきことながら、全大藏經が日本語で完成されることは更に重大の日本人的大事業である。漢文の大藏經は日本人にとつては「假綴ぢ」の大藏經である。日本人にとつては日本文の日本語の大藏經が「本綴ぢ」であるべきである。原典を眞に讀破することに依て、最も正しき日本語の大藏經は始めて完成されるであらう。漢文から譯すと難しくなる。漢譯を參考にして原典から、漢文のみのものはそれに準じて書かれなければならぬ。文化の象徵は

言語であり、また文章であるとも言はれる。日本人が眞によく、佛教を日本人として日本人の血肉脈管の中に生かさんがためには、このことが特に肝要である。白隱や親鸞や法然や日蓮や道元其の他の指導的な大佛教人が、和文を重んじた傾向のあるのはまことに先覺の暖皮肉、薩埵の大行願であると言はなければならぬ。吾々凡愚はやさしいことを難しく書く。これらの人々は難しいことをやさしく表現せんとしたのである。眞に身を以て古典を理解し體得せることを、現代の日本人の社會的形態の中に生きるやうに表現すること、それが最も現代に肝要である。

三

近來佛教復興の唱へられるに至りし原因は種々考へられるであらうが、その最も主要な原因の一と考へられるのは、東洋文化、乃至日本精神の再吟味の機運に依るものである。その點に於て、最近に於ける佛教復興の機運は右翼運動と脈絡を有し、その一環をなすものであると考へられる。日本人の中の或る者、支那、印度の或る者は、萬人が眼をくらまされてゐた西洋文化が、漸く人類を從て東洋人自身を必しも救つて呉れるものでなくして、却て東洋自身の文化の中にも、西洋文化と同じ意味に於て、また別の意味に於て、多くの價値あるものゝ存することに氣がつきだしたのである。言ふ迄もなく、西洋文化を輸入することに依て東洋殊に日本の社會は劃期的な大發展を遂げた。それは主として自然科學的なものに於て物質的精神的に驚くべき變革を與へた。而してそれと共に或る時代に於ては、西洋崇拜のあまり今から考へれば實に解り切つたつまらぬことであつても、それが英佛獨の横文字で書いてあるが故に何か價値深きものゝ如く思はれたりした。然しながら東洋人殊にその中で少くとも現代的には最も優秀にして指導的なる日本人は、そろそろ

毛唐の言ふことも殊に精神文化的にはたいしたものではなく、せいぜい同じレベルに考へるのが至當であること、彼等の述べてゐることを解つてみれば、たいして別のものでないこと、東洋や日本と同じく良いものもあればそれ程でないものもあること、良いものは世界中何處でも少いこと、中には東洋や日本に却つて西洋にない良きものゝあることに目が醒め始めたのである。良いものは何處へもつていつてもよいこと、良いものは何處でも少いこと、良いものゝ製作は何處でも困難なことが漸く解り始めてきたのである。つまり、東洋人乃至日本人が自身を知ると同時に、西洋人をも次第に如實に理解するに至つたのである。玆に於てか東西兩洋の文化の本質的聯關が今後益々緊要な問題となつてくるであらう。一方に於ては、その各々の文化の特質を研究しながら、他方に於てはこれら兩者の文化の本質的聯關乃至綜合的統一の問題が必然的に避くべからざる問題として生じてくる。もともと西洋學だの東洋學だのと兩者の間に隔壁を作つて兩者が全然無關係の如くに考へるのは誤れるも甚しきものである。東洋人も西洋人も言ふ迄もなく人間である。若し眞理が普通妥當的な全人間的な問題を問題とすべきものであるとするならば、兩洋の文化の間にむやみに隔離や溝渠を設けることは、全人間の文化發展の上に於てまさしく無用の障害をなすものであるとしなければならぬ。

斯樣にして、現在の日本に於ける佛敎復興の機運は、決して今全世界に於ける宗敎復興の傾向にのみ從へるものではない。言ふ迄もなく、殊にヨーロッパに於いては共產主義的、社會主義的、唯物論的な考へ方が一應行くべきところまで行つたものとして、今や諸國に國家的意識が强烈となり、宗敎の問題などが再び考へられようとしてゐる。宗敎は消えさうでも中々消えない。平常はさほどに見えなくとも、あの唯物論的な西洋人の社會に於いてさへやはり宗敎的意識

は舊く且つ新しく依然として盛にある。モスクバでも中々消えるどころでない。一方辨證法的神學などいふ新しい宗教の取扱ひも生じてゐるし、哲學的には歴史的に既に長く宗教に就いて價値だの理想だの超越だのと盛に論ぜられてゐる。社會生活が完くない限りいつまで經つても社會運動は消滅するものではないが、一時全世界に見られた社會主義的運動はひところ程の活潑さをもたなくなつた。そして一時は頭から大雜把に宗教は阿片とも言はれたものであるが、この頃では、社會運動などこそ却つて宗教的信念の上に立つてゐるものであるなどゝ考へられるやうになつた。

そこで現代に於ける佛教復興の機運は、上述の二つの根據の上に出現してきたものと見るのが至當である。社會主義的運動の後に現れた世界的宗教復興の傾向、その再吟味の機運と、今一つは東洋人乃至日本人の脚下的自覺に依る東洋意識並びに日本意識の機運との二つに基礎を置くものであると考へられる。先頃森戸辰男氏は東朝紙上で「宗教復興私見」を發表し、佛教復興の特質と意義とに就いて述べてゐる（一七四一三號）。がこれは、日本や東洋の學問はあまり知らないで、西洋の學問ばかりしてゐた學者の、東洋や日本や佛教の良いところをさつぱり知らぬ、食ふことには困らぬ人間が日本人東洋人でありながらそれを忘れて物徂徠的に西洋ばかり崇拜しかぶれていい氣持で研究をし學問をしやうとして一寸やりそこねたといふが如き種類の人間の言ひさうなことの標本的なものである。氏曰く「佛教復興の擔當者はといふに、專門的又は半專門家的宗教家、出版業者、當局の思想政策等々がその促進的契機であることは別として、その大衆的基礎に至つては極めて不明だ。恐らく一部分は移氣な知識階級的デイレツタントの佛教趣味の勃興を背景とし、他の部分は疲勞し敗殘した消極的大衆の慰安的欲求の上に立つものであらう。いづれにせよ進歩的な勞働者・農民

學生・知識階級のやうな活動的・積極的分子をその大衆的負擔者に持たぬことはほゞ確かである云々」。これは佛教復興に關心を有する人々のために掲げて注意を促すと共に、森戸氏に向つては、も一度この活字となつた文字を吟味せんことをすゝめる。それがためには、(一)この「佛教復興の擔當者は」といふ代りに「あらゆる運動の擔當者は」と置いて考へてみること、(二)次に宗教は最も多くどういふものゝ味方であるかといふこと、(三)佛教には疲勞し敗殘した者を容れる力があると共に、如何に强力な積極的な側面が存してゐるかといふことを考へてみるべきである。法然でも、親鸞でも、道元でも、日蓮でも、かうした人々が、如何に宗教的に弱く且つあはれであると同時に、如何に積極的戰鬪的にして當時の役人の權威なぞ問題にしてゐなかつたかを考へてみるべきである。彼等は何れも政治的役人の考へる善よりもより高き善を問題としてゐると考へてゐた。佛教が眞に復興を目的とすることになれば、これらの精神は皆正に生かさるべきである。彼等は常に「俗すら云々況んや出家をや」と口癖のやうに言つてゐる。森戸氏の佛教復興觀は、佛教の良いところを少しも知つてゐない者の私見である。佛教をさつぱり知らないらしい。一寸見たところ佛教は森戸氏がこゝに述ぶるが如き貧弱な唾棄すべきものであるかも知れないが、少くとも佛教復興を心の底に持つが如き人には、その人間的情熱に於いて敢へて森戸氏に劣るが如き者ばかりではないであらう。「恐らく一部分は移氣な知識階級的デイレッタントの佛教趣味の勃興を背景」としなどと言ふがそれは稍々氏等グループの一友に對して、氏が氏の關係せる事柄に就いて述べてゐることの樣にもとれる。氏はさかんに敗殘者とか消極的とか進步的とかいふが、疲れた敗殘者の味方結構ではないか。佛教は一つの宗教である。社會運動ではない。宗教は人間を全體的に問題とし對象とする。社會組

織や經濟問題の研究ばかりがその全部ではない。佛教は階級のことばかり考へてはゐない。全體のことを考へてゐる。皆共成佛道を志向する。そしてその意味に於いて社會、國家、世界を少しでもよりよくしようと考へてゐる。菩薩の大願などといふことは皆さういふことを述べてゐるのである。抑々階級々々といつてむやみに階級をつくつて兩方を戰はせることは、マルクス主義の一大缺陷である。對立して戰ふばかりが能ではない。結合し和合し相互扶助することがまた人間的社會的生存の根本要素である筈である。クロポトキンなども相互扶助が如何に生命の存續にとつて必要なるかを說いてゐる筈である。眞の佛教復興は決して森戸氏の言ふが如き「有閑的」な人々や、「外面的な妥協」などに依て實現されるものではない。「有閑的」は固より誤つてゐるが、マルクス主義の徒は神經衰弱的病的に近いとも言へる。「外面的な妥協」といふが宗教は常に魂の問題であり、それは最惡の敵であつた。身心のあらゆるものを獻じて生と死との間を幾度かさまよつて終に正覺に到達した釋迦の根本精神を復興せんとするものは、また不惜身命の態度に於いて始めて達成されることであることは言ふ迄もない。諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛教が佛教の根本生命であると夙に言はれてゐる通り、惡の何物なるかの正體をつきつめてこれを摧き善を樹つることが佛教の根本精神に外ならぬことは固よりであるが、唯物史觀を基礎とせる一經濟的社會觀としてのマルクス主義の階級鬪爭主義の如きは、佛教の必しも讃するところではない。それにしても森戸氏の斯くの如き現代に於ける佛教復興に關する「私見」は、近日「中外日報」所載の「佛教復興の社會的立場」の論文と共に、佛教復興に關心を有する者の熟讀反省する價値あるものであり、諸佛の精神を沒却して俗よりも俗なる墮落無慙の徒を警むるに足る鐵槌であり、三十棒である。

四

佛教は歴史的に極めて發展的であつた。この發展的なる精神の肯定に依つて大乘佛教は始めて遺憾なくその成長を遂げることが出來たのである。發展的であるといふことは成長するといふことである。體驗的には佛教は釋迦の成道に於いて加ふるところなき迄に完璧の域に達してゐたとはいふものゝ、それは少くとも學的理論的には大乘佛教に至つて益々發展せしめられたのである。佛教は印度の哲學や精神的文化の精萃である。それは更に發展して全東洋の文化の華と咲き、全世界の文化の最も意義深き人類の咲かしめし華であり、實であるべきである。佛教は極めて發展的であつて、大乘佛教として他のあらゆる文化を食物として自己の生ける內容となし、成長した。この點は大乘佛教の最も優れたる性質の一である。その發展を肯定し、全人間的眞理たらんことを理想としてきたことは、遙かにキリスト教などにまさる處がある。尤もキリスト教といつても、佛教に於けると同樣に種々の立場のものがあるが、何れも大乘佛教ほどに發展の精神を肯定してゐない。プロテスタンティズムなどでも、神の子としてのキリスト等といふことにあまりこびりつき過ぎてゐる。中には歴史とか發展とかいふ概念は西洋ではキリスト教から始まつたといふものもあり、默示錄の所述などからさういふことも言へないともないが、その歴史的發展の學問的意義からいふと、到底大乘佛教の發展的であつた點には及ばない。井上(哲)氏は大乘佛教の主要特質として七つを列擧され、その第一に、相對を絶して絶對を把握せんとすること、言はゞヘーゲルのアウフヘーベンがそれではないかと言つてゐるが、これは結局、すべて著するを排し、無我を說き、放下を說き、禪定を說き、中觀を說くことに外ならぬ。より高く、より多くと、全生命の全體を把握せん

とすることに外ならぬ。そこに成長があり、發展がある。生命は生きてゐる。人間は生きてゐる。佛教も一つの生命である。生きてゐるものは動に於いて靜に於いて發展し成長すべきである。病氣になれば退化したり、やはり發展したり、歪められたりする。根本佛教は大乘佛教を經て全人間の普遍的根本的なる最高の理想としての大眞理の確立を愈々明白に目指すに至つたものと言ふことが出來る。理論と體驗とは關係なき別のものではない。體驗を統一的に言語や文章に表現したものが理論である。體驗と緣なき經や論は無意味である。この意味に於いて眞の經師や論師は輕んぜらるべきものではない。體驗なくば如何なる價値ある經も論も疏も語錄も現出してくる筈はない。體驗と關係なき空理空論ならば何等存在の價値はない。然し兩者の中何れがより根源的であるかと言へば、いふ迄もなく體驗が根源的である。體驗を分析し、秩序づけ、指針を與へ、體驗に役立つものとしてのみ理論の價値は存する。この生ける第一義諦たる體驗の前には、八萬四千の法門は單なる手段であり階段である。然しそれに依つて體驗に到達するといふ意味に於いて、それはまた體驗の一部分、體驗的なものと言はるべきである。打坐の當相、以心傳心、不立文字、拈華微笑等いふことは、總べてこの意義に於いて始めて正當に解會さるべきことである。打坐も、念佛、題目の唱名も、比較的に自力的他力的の差こそあれ、何れもこの釋迦所成の大眞理を目指し、その大眞理の中に於いて發展成長せんとする生命の鼓動である。

自分は最近、東朝紙上で哲學者、得能氏の書かれた「正受菴の秋」といふ文章を讀んで感銘した。氏は長らく哲學者として專門家の間にのみ知られてゐたやうであるが、その佛教への理解、東洋的な寂びの心にくき境を保有せることは、ひそかに既に長く尊敬してゐたところであり、決して此頃佛教復興の機運に乘じて白隱などを急に口にしだしたのでな

いことは言ふ迄もない。自分は十幾年前に氏の現代哲學講義、フッセル等をきいて、聾耳を悲んでゐたもの〻一人であるが、かの短い一文をみると、老來益々その本來の東洋的日本的な素質が冴えてきたやうである。その靜と動とを克服せる澄み切つた精神、正受菴を後にして實つた稻田の路を、「種々の閑想に耽りながら、正受菴を辭して外に出れば、陽は西に傾いて、塒を急ぐ鴉が點々と亂れ噪ぎ、千曲川の水はその赴くべきところに急いで、流水如有意、暮禽相伴還の趣があつた。一切のものは皆なその趨くべき所に落つくのである。」と意識しながら歩いてゆく里芋頭の一老人は、まことに昔時の高僧が秋風落寞として寒さうに錫をひとり杖ついて行くやうな俤である。氏は或る時、或る會合で「山岡鐵舟……」とひとりごとのやうに只一語つぶやいてゐたのを聽いたことがある。それが今でも耳底に殘つてゐる。ゑんぎのわるい失敬なことを言ふやうであるが、この一文はとかく健康にめぐまれなかつたときく氏の絶筆であり、墓碑銘であるかも知れない。こんなところでこんなことを書くのは間違つてゐるかも知れないが追慕まことに堪へざるものがある。東洋文化、世界文化のために尙ほ健在を祈らないではゐられない。また一方から言へばかういふことを書くことは、自分の下手な佛教復興私見をものすることよりも、佛教復興に資するところがあるやうに思はれる。決してかういふ心持は森戸氏其の他の考へるやうな「移氣な知識階級的ディレッタントの佛教趣味」の勃興などでは說明の出來ないものである。若し斯くの如きもの迄も單なる趣味に過ぎないとするならば、それでもいい、然しながらさうすれば大河內氏の滑稽な言ひ草ではないが、社會運動でも森戸氏のやつてゐるやうな仕事でも皆すべて趣味に外ならぬことゝなるであらう。そして今一つ、ついでに記してみたいのは、紀平氏、西田氏の如き通俗的にも自他共に東洋乃至日本の學問に支

持や理解を有するとされてゐる人々は言ふ迄もなきことながら、常に東洋的な學問や日本的な學問に對立して、ヨーロッパ的な學問の價値、その哲學的な優秀さを說くことに肩を張り、肘をいからしてをられたかにみえる哲學者、桑木氏が、十牛の圖の話など聞いて「胸がすうつとする」と言ひ、肘はりカラーをはづして「靜に好きな本でもゆつくり讀んで暮してみ度い」などといふ悠々とした自適の生活をなつかしむ心持は、いくら西洋の學問を西洋的に永らく研究してゐても、やはり畢竟日本人は日本人であり、東洋人はやはり東洋人であることの僞りなきを證する心の底からの聲なのではなからうか。如何にそれが自分の使命であり、職責であるとしてわれと剛氣に張てそしてそこにまた氏の存在の意義があつたにしても、得能氏の所謂「一切のものは皆その趨くべき所に落つくのである」といふところに斯くの如き心持の湧出が存するのではあるまいか。氏が謠ひでは素人の域を脫してゐるといふ秘技などある一面は、一方からいふと、時代の勢や自分の希望のまはりあはせてたとひ西洋哲學の研究者になつたものゝ、血液的にやはり日本人、東洋人であるがために自らさういふ本音がさういふところにじみ出てゐるのではないかと思はれる。氏はまた哲學的には中々剛氣であるらしく、そこに氏の存在の價値があると自覺されてゐたらしいから、自分がこんなことを書くと氏の哲學的性格が出て「なアに」なぞと張るかも知れないが、要するに氏もまた畢竟日本人であり、東洋人であつたことには變りはなく、そして日本の文化史上、西洋哲學を日本文化、東洋文化の中に食餌として與へ、それを成長發展せしむる役割を結局果したことになるのである。斯くの如くにして日本精神、日本文化は常に過去に於いても他國の文化を吸收して我がものとなし、それを同化せしめて今日に至つたのであり、そしてまた日に月に發展成長しつゝあるのである。」森戸氏

の如きも結局するところ同樣に考へられてよいのである。國法に觸れゝば刑せられるのは當然であるが、共產黨の手先になつて刑務所や臺灣で倒れたやうな人でも、極めて高い立場から日本精神史的、日本文化史的に考へれば、何れもまたさう考へられてよいのである。

要するに此の人々は何れも畢竟日本人であり、日本文化發展のために樣々の役割を果したものと考へることが出來るのである。日本文化は印度文化を吸收し、支那文化を吸收し、西洋文化をまた吸收して、その度毎に、より以上のより高き自己の文化を形成するのである。過去もさうであつた。現在もさうである。未來も恐らくさうであらう。

上述せるが如く、佛敎殊に大乘佛敎が一種の辯證法的態度をその根本性格として有してゐるものであることは容易に察せられるが、それはまた法身とか唯心とかに於いて、普遍的なロゴス的理性的抽象的な原理を說くと共に、一木一草一瓦礫をもあるがまゝに把握せんとする具體的個體的現實的意識を强く有してゐる。眞の正覺、阿耨多羅三藐三菩提、Anuttara-samyak-sambodhi（釋尊の用いた言語はまだ明にされてゐない）は斯くの如く普遍的抽象的なものと、個體的現實的なものを全體的に確把することに依つて始めて實現されるものとされてゐる。決してそれは單なる觀念論的なものゝみではない。佛敎の哲學的叙述が屢々單に觀念論的なものでのみあるやうに例へば三界唯心、一念三千等いふことを誤解して說かれたりするのは、誤りである。佛敎には一面に於いてまた極めて實在的經驗的現實的なものを顧慮する素質がある。草木瓦礫を顧慮し、狸奴白狐を問題とし、闡提成佛を論じ、我見を捨て、自己の心意識の運轉を止めて禪定に入つて十方の佛を見ることを說き、行持綿密を說き、威儀卽佛法、作法是宗旨を說き、一卽一切、一切卽一を說く。

而してこれやがて菩薩の大行願の湧出し來る所以となされてゐる。かくして大乘佛教の論理が殆どヘーゲルの辯證法的論理に庶きものであることは、今や極めて多くの人々に依つて承認されてくるところであるが、その意味に於いて、確かに大乘佛教の論理は、個別的具體的乃至經驗的なものをも十分顧慮してゐるものである。そして然も斯くの如き問題は、所謂現代の哲學に於いても尙ほ最も主要なる根本問題の一つであることを思へば、古き佛教の精神は決して現代に復興せしむることの時代錯誤などでないことを知るのである。

斯樣にしてマルクス主義の書物のみを聖典の如くに考へてゐる森戸氏等のあまり好まないらしい表現たるこの佛教の「無盡藏の寶庫」から、吾々はその微の生えてゐるかに古く思はれるもの、中より、實に無限の現代的に生き得る問題や眞理を發見することが出來るのである。森戸氏などがドイツ語やロシヤ語をつゝいて有難がつてゐる一方に於いて、却つて逆にたとへ未だ一部分的にのみではあるかも知れないが、英、獨、佛、米の諸學者に依つて極めて新鮮なる興味を以て佛教は今や盛に研究されつゝある例が尠くないのである。人はまことに、出來たら百丈禪師などの言へる一日不作、一日不食の如き精神を改めてよく吟味して見るべきであらう。一粒米の價値の認識が如何に佛教にとつては根本的な大問題であつたかを味得して然るべきであらう。念々是れ臨終時、非常の時として、夜臥するにさへ脚絆がけの旅姿で終始せんことを忘れなかつた一遍の如き精神を改めて解釋してみるべきである。糞掃衣（袈裟の起源）を纏つて頭陀を行ぜしが如き生活態度が、如何に物の價値を認識し自利を越へて利他の愛の一念に生きんとする精神に外ならなかつたかを見るべきである。斯くの如き徹底せる諸の見方を體得せる佛教が若し時代に生きて社會、國家、世界を救濟しな

かつたとするならば、それは偏に佛教そのものゝ眞理內容の貧弱さから來ることではなくして、唯だそれを本來の意義に於いて生かさゞる坊主の罪である。それを本來の意義に於いて把握せざる人間の罪である。佛教々々といふが佛教などは何處にもない。唯だ世界の眞理のみがあるとも說かれてゐる。愚僧共は無益な空虛な宗論などで挑み合ふが、道元禪師の如きは禪宗などゝ唱へて固まるのは無上のたはけものゝ所爲であるとも述べてゐる。

眞理に新しいものはないとも言はれてゐる。新しいものは古いものであり、古いものは新しいものであるとも認識され得るのである。ルネツサンスにとつて古きギリシヤ的思惟は極めて新しきものに外ならなかつた。例へば法華經觀音普門品の如きは極めてポピユーラーな古いものであるが、壽量品などでも同樣に吾々はその中に儼然たる一個の宗教哲學をさへ見ることが出來る。その意味を現代的に表現すれば、それは堂々たる一個の現代的宗教哲學的根本原理の叙述たり得るものと思はれる。今その充分な分析を學的に全般的に精密に或ひは嚴密に玆に叙述することはせず、それはまた何れかの機會に讓るとしても、信仰の本質や、佛（或ひは神）の對人間的諸相に就いて遺憾なき表現がそこに把握さるべきである。殊にその所說が全世界に存するあらゆる佛體神體の諸相を皆觀世音菩薩の所現と見てゐるが如き點は、特に宗教哲學の統一的方面からいつて稀に見らるゝ一つの根本問題を明確に叙述してゐると考へられる。世尊觀世音菩薩、云何遊此娑婆世界、云何而爲衆生說法、方便之力其事云何。佛の性質が三十二相八十種好であり、それは無盡無限の諸相といふ義であり、それがまた妙相の內容に外ならないことは玆に今更縷々述べる必要もなからう。そこで問題の中心は、觀世音菩薩の此の娑婆世界に於いての現じ方に存する。觀世音菩薩は通常女性的な筆致を以て畫などに描寫せ

られてゐるが、これ全く彌勒佛など〻同樣にどうにも表現の仕方に窮したる結果、假にあのやうな描寫をしてゐるのであり、本來を言へば決して斯樣に表現されてはならないのである。觀世音菩薩は本來無盡無限の現じ方をこの世界に於いて人間に對してなすものであつて、決して單に女性的なものとしてのみ考へらるべきものではないのである。あらゆる一切衆生の得度の因緣に應じて如何なる相を以てしても出現し得られるといふのがその性質である。假に何れかの一つの形態を以てこれを描寫すれば、それは唯だ一つのその形態に限定されて表現せられがちである。一つの或る表現に於いてそれが無盡無限の力や相を有するものとしての描寫をなすことは決して容易のことではない。何かを以て表現すれば、それはその何かに限定されがちである。一つの或る限定に於いて無盡無限の限定を內在的に包括することは最も表現に於いて困難なるところである。それ故に觀世音菩薩の本質は言詮不到のものとして禪的にむしろ表現さるべき性質のものである。阿と言へば阿に著し、一といへば一に著する。それは文字以上、言語以上のあらゆる文字や言語を作り出だす根本作用に依つて理解さるべきものである。普門品の說くところに從つて考へてみると、觀世音菩薩の現じ得る諸相は無限であつて、決して一つの女性的な崇嚴な一相を以て容易に表現し規定し得られるものではないのである。佛身を以て得度すべき者には觀世音菩薩は卽ち佛身を現じて爲に法を說き、辟支佛身を以て得度すべき者には菩薩は卽ち辟支佛身を現じて爲に法を說き、聲聞身を以て得度すべき者には菩薩は卽ち聲門身を現じて爲に法を說き、梵王身を以て得度すべき者には菩薩は卽ち梵王身を現じて爲に法を說き、帝釋身を以て得度すべき者には菩薩は卽ち帝釋身を現じて爲に法を說き、自在天身を以て得度すべき者には菩薩は卽ち自在天身を現じて爲に法を說き、天大將軍身を以て得

度すべき者には菩薩は卽ち天大將軍身を現じて爲に法を說き、毗沙門身を以て得度すべき者には菩薩は卽ち毗沙門身を現じて爲に法を說き、小王身を以て得度すべき者には小王身を現じて爲に法を說き、長者身を以て得度すべき者には長者身を現じて爲に法を說き、居士身を以て得度すべき者には居士身を現じて爲に法を說き、宰官身を以て得度すべき者には宰官身を現じて爲に法を說き、婆羅門身を以て得度すべき者には婆羅門身を現じて爲に法を說き、比丘比丘尼優婆塞優婆夷身を以て得度すべき者には比丘比丘尼優婆塞優婆夷身を現じて爲に法を說き、婦女身を以て得度すべき者には婦女身を現じて爲に法を說き、童男童女身を以て得度すべき者には童男童女身を現じて爲に法を說き、天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等を以て得度すべ者には觀世音菩薩は卽ち皆夫々にそれと同一の身を現じて爲に法を說き、執金剛身を以て得度すべき者に對しても全く同樣である。そして斯くの如き態度を以て更に述べるならば、應にキリスト身を以て得度すべき者には觀世音菩薩は卽ちキリスト身を現じて爲に法を說き、社會運動家身、哲學者身を以て得度すべき者には觀世音菩薩は卽ち社會運動家身、哲學者身を現じて爲に法を說き、心理、論理身を以てすべきは心理、論理身を以てし、繪畫、建築身を以てすべきは繪畫、建築身を以て爲に法を說き、等々々となるのであると考へられる。斯くの如く千變萬化、衆生の好むところに應じて、應病與藥、臨機說法するのが觀世音菩薩の性質である。それ故にこそ之は施無畏者と人間の娑婆世界に於いて號せられるものであると述べられてゐる。斯樣に見てくると、觀世音菩薩といふ考へ方は、全世界のあらゆる存在を包藏するものとしてのみ考へられるものである。決して一宗一派乃至佛敎又は宗敎といふが如き特定されたる狹き範疇內に閉ぢ込められるには餘りに廣大無邊なるものと思

惟されなければならぬ。その問題とするところは、一切の凡そ存在するものを貫き、全世界に亘り、可能的な全宇宙、全認識界に關係するのである。斯くの如きが法華普門品に叙べられてゐる根本思想の一であると考へることが出來るのであつて、一口に佛教復興などと輕々に論ずることは出來難いことゝなるのである。佛教はまさしく人類の有する一つの最深最高なる無盡藏の精神的寶庫である。その中には幾千萬億の人間の精神的努力が織り込まれてゐる。それは東洋に於ける精神文化の萃であり、之を現代に更生せしめ現代的に發展せしむることは確に種々の方面から考へて殊に現代日本人の使命の一である。日本人の手に依つて再吟味され更新されることに依つて、それは現代及び將來の世界に向つて西洋文化と共に最も深き意義ある人類の二大精神文化の根源の一と少くともなるであらう。かのフエノロサが夢殿の本尊であつたかを發見するや、をのづから頭が下がり、合掌しないではゐられなかつた如き純粹な物の見方を以て吾々は改めて佛教を再認識し、意義深き佛教復興の精神を將來しなければならぬ。徒らに國際的なことや、菩薩的居士的なことばかり論じたやうに見えるが、それは本誌本號にとつて斯ういふことが最も興味もあり、意義もあることであらうと思ふからである。紙數の都合上充分なことは述べられないが、余は少くとも等澍和尚である。恭敬三寶が佛教の根本であることを無視してゐるのではない。それは解り切つたことである。九拜。又、三拜。

（於湘南面壁舍昭和九年十月）